



意思としての母性愛

松本 侑壬子・ジャーナリスト

松井久子監督の第3作「レオニー」が公開中。日系アメリカ人の世界的彫刻家イサム・ノグチの母親レオニー・ギルモア（エミリー・モーティマー）の波乱に満ちた生涯を描いている。

100年前、ニューヨークで日本人青年詩人野口米次郎（＝ヨネ、中村獅童）に恋し身ごもるが、ヨネは帰国。生まれた子イサムへの人種差別を避けて母子は父の国日本へ。だが、明治の日本は、米国人女性がすんなりと受け入れられる社会ではなかった。既に妻子を得ていたヨネはレオニーに別宅を与え、「郷に入れば郷に従え」と言う。不実な男に一発ビンタを喰らわせて、家を出たレオニーは…。

若き日、布林マー女子大で出会った津田梅子（原田美枝子）を通して日本への興味と憧れを抱き、卒業後翻訳を手伝ったヨネとは男女の仲になり、そしてシングルマザーとしてイサムを得た。愛する息子に天賦の才能を見出すと、「人種、国籍、時代状況に左右されず、個性を發揮できる芸術家に育てよう」と決意する。イサムの幸せを願う母性愛だが、それは本能的な盲目愛ではなく、自分の道は自分で切り拓くというレオニー自身の強い意思に根差している。

レオニーはまだ10歳そこそこの息子に海を臨む自宅の設計図を描かせ、大工に弟子入りさせた。イサムは寝室の行燈の光の柔らかさ、海

の向こうにそびえる富士山の美を心の奥深く刻み込む。後年、イサムの作品世界に花開く日本文化の伝統は、学校や専門教育からではなく、こうした大工の棟梁（大地康雄）や女中のキク（吉行和子）、レオニーの英語の生徒（中村雅俊、柏原崇ら）、また小泉八雲未亡人セツ（竹下景子）ら、穏やかで優しい品格あふれる普通の日本人たちとの日常の触れあいからイサムが体で覚えていったことが、丁寧なエピソードの積み重ねの中で描かれる。

少年時代、実際のレオニー母子の近所に住んでいたという作家・獅子文六の随筆の中に「鬼瓦のような顔の、大柄な女」といった描写がある。察するに、イサムがいじめられるとレオニーの母性愛は夜叉にも変わる、そんな姿がこわごわ遠巻きに見る思春期の少年にはそう映ったのか。画面ではレオニーは、アメリカでも幼いイサムをかばって悪がきどもを追ひ払っている。

映画の冒頭部分に出てくる、臨月のお腹を抱えたレオニーが馬車でカリフォルニア・パサデナの開拓村にたどり着く場面。たった一人でニューヨークから大陸を横断して、秘かに出産のためにやってきた娘を迎える母親の家はテント造り。やがて宇宙ロケット研究で知られるようになるこの町は、まだ馬をつなぐ柵やつるべ式井戸のあるカウボーイ時代の雰囲気。画面に1904年と出る。そうか、この3年後、この近くの住宅開発地「ハリウッドランド」（当時）に最初の映画撮影所が建てられたのだ、と映画史の1コマが浮かぶ。日本到着後にヨネの用意した別宅は、明治村の森鷗外、夏目漱石の旧宅で撮影された。これにも何か歴史の香りが漂う。

派手な見せ場はない代わりに、14稿まで書き込んだ脚本の1場面ずつに奥行きがある。レオニーの意思としての母性愛は、こうした画面のいたるところにあふれ、明快である。

『レオニー』

日本・アメリカ合作映画（132分）／松井久子監督

© レオニーパートナーズ合同会社、角川映画配給

